

別紙 1

論文審査の要旨

| | | | |
|---|---------------------------|-----|------|
| 報告番号 | ㊦・乙 第 2862 号 | 氏 名 | 藤本道生 |
| 論文審査担当者 | 主査 脳神経外科学講座 水谷 徹 教授 | | |
| | 副査 臨床病理診断学講座 瀧本雅文 教授 | | |
| | 副査 解剖学講座（顕微解剖学部門） 本田一穂 教授 | | |
| <p>（論文審査の要旨）</p> <p>本論文は開頭手術において中硬膜動脈（MMA）をより確実に温存するため、トンネル構造を有する中硬膜動脈溝の構造を観察し評価したものである。筆者は晒し頭蓋骨 50 例を用いてトンネル構造を形態学的に評価し、28 体の cadaver を用いてトンネル構造内の血管と周囲組織との関係を組織学的に評価した。</p> <p>結果として、晒し頭蓋骨標本では 50 例中 43 例にトンネル構造が確認され、トンネルの平均長は 9.2mm、眼窩外側縁からの平均距離は 24.0mm であった。組織標本では MMA がトンネル内で硬膜から連続する膠原線維組織で覆われ、トンネル外と同様に小血管を分岐し、中硬膜静脈と伴走していることが確認された。以上の結果から、中硬膜動脈溝のトンネル構造は常に pterion 周囲に存在しており、眼窩外側縁から一横指以内であれば、MMA を損傷する危険性は少なく、組織学的にはトンネル構造内でも膠原線維組織に覆われて走行しているため、慎重にトンネルを削ることにより、MMA を温存することが可能であると考察している。</p> <p>以上の論文内容は、トンネル構造を有する中硬膜動脈溝の構造を理解する上で学術上価値があり、学位論文に価すると判断した。</p> <p>論文題名 : Intracranial Bony Canal of the Middle Meningeal Artery: Morphological and Histological Analysis</p> <p>掲載雑誌名 : Okajimas Folia Anatomica Japonica Vol.93, No.4 2017 年 掲載予定</p> | | | |

（主査が記載、500 字以内）